統一新羅時代の南原小京の都市構造検討

李　　在　桓
人間文化学研究科 地域文化学専攻 博士後期課程

Ⅰ．はじめに

統一新羅時代には全国の地方行政体系が九州と五小京に整備された。五小京の中で南原小京は、現在の全羅北道南原市に設置されたことが知られている。南原地域は三国時代には百済の古龍郡であったが、具体的記録や関連遺跡はほとんどない。南原は慶尚南道方面から全羅南道へ向かう主要な交通路上に位置し、全羅北道の全州[1)]方面に向かう交通路の分岐点にもあたる交通の要地である。

統一新羅時代の南原小京に関連する研究は、基礎になる関連遺跡の調査成果や文献史料が貧弱であることから、文献史学と考古学ともに最近まであまり行われてこなかった。

しかし、1910年代に製作された南原の旧地籍図の分析から古代地方都市の土地区画の痕跡が確実に見えるところとして注目され、一部研究がなされている。明確な土地区画の痕跡が地籍図上に確認されるため、五小京の中では都市構造が確認された地域として認識される傾向がある。ところが、考古学的研究に関しては調査成果の不足で進展がほとんどないとも言える。

本稿では、まず南原小京の関連史料と既存研究を検討する。それから現在までの関連遺跡と調査成果をまとめ、考古学的検討を試みよう。南原小京に関連する考古資料が足りない部分は、地籍図の分析を通して南原小京の都市構造の復元案を検討してみる。

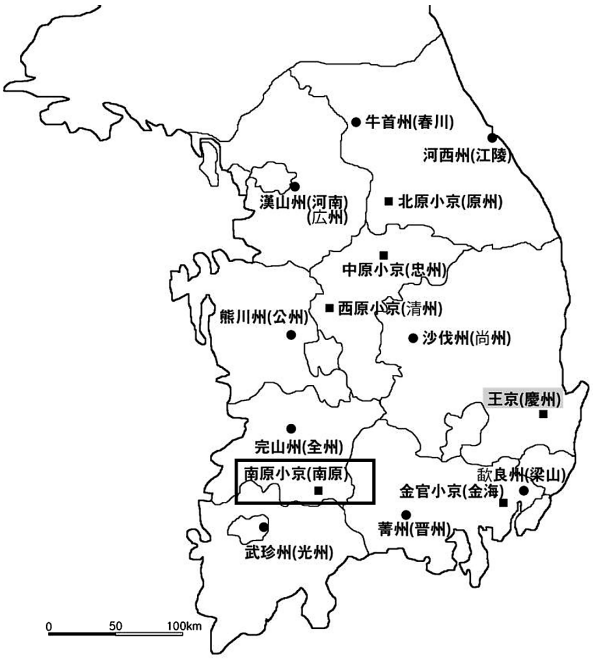

図１ 南原小京の位置（現在地名）

Ⅱ．南原小京の関連史料と既存研究

1. 関連史料

南原小京に関連する史料は多くないが、小京の設置と小京城の築造記録が見られる。

『三国史記』によると、新羅の神文王5（685）年に南原小京の設置記事があり、神文王11（691）年に小京城を築造した記録がある。

『三国史記』「新羅本記」第8、神文王五年
　三月 置西原小京 以阿飡元泰爲仕臣 置南原小京 …
『三國史記』「新羅本紀」第8、神文王十一年
　十一年 春三月 … 築南原城

一方、南原小京に直接的に関連するものではないが、南原地域には区画地割が存在したことが朝鮮時代の記録から確認できる。『新増東国輿地勝覧』には唐の都督劉仁軌による「井田遺基」があったという記録がある。

2.『新増東国輿地勝覧』

井田遺基 唐劉仁軌為刺史兼都督、邑内里□取井田劃為九區、至今遺址尚存
（邑の内側の村に井田法を使って、九つの区域に区画して、その址が残っている。）

この記録から、朝鮮時代にも南原地域には地割の存在が確認できることがわかる。

表１　南原小京の設置

	神文王5年（685年）	景徳王16年（757年）	築城記録	現在地名
名称	南原小京	南原京	691年	全羅北道南原市

図2 南原の地籍図（1917年）

図3 朴泰祐の南原小京復元案（朴泰祐 1987から引用）

2. 既存研究の検討

南原小京の場合、考古資料はほとんどないので、考古学的な検討が容易ではない。しかし、旧地籍図から区画地割の痕跡が明確に確認できることから、旧地籍図を活用して都市構造の検討が行われてきた。南原小京の都市構造に対する本格的な研究は、朴泰祐（朴泰祐1987）から始まる。朴泰祐は南原の旧地籍図（1917年製作、図２）を利用して、当時の市街地がもっとも明確であった南原小京の都市構造復元を行った。

朴泰祐の研究では、旧地籍図を分析した結果、南原の市街地に道路によって区画される一辺160ｍ区画の正方形の坊が確認された。約160ｍの幅は道路の幅も含めた数値である。その区画された坊が分布している範囲が、南原小京が設置された当時の市街地であると推定できる。坊が分布している範囲は南原川と蓼川（ヨチョン）が流れる間の現南原市街地である。

旧地籍図の精密な分析から、朴泰祐は復元案で現在南原市内の東南部一帯に一辺160ｍを基本とする正方形の区画地割が南北約1.5km ×東西1.7km の範囲になされたと見ている。区画地割は南北では160ｍ区画が10列ある。東西は約幅80ｍの細長い区画が1列、それを中心に160ｍ区画が5列ずつある。中央の東西約幅80ｍの細長い区画1列が中軸大路であると想定している（図３）。

朴泰祐は、南原小京の構造の検討から、区画地割の中央部北側に官衙が位置していると見ている。また、小京城に関してはあまり検討していないが、南原城ではなく、市内の北東側に位置する蛟龍山城を関連がある城郭としてあげている。朴泰祐は統一新羅の地方都市を三つの類型に分類して、区画地割計画の実施が判明し、これと平行して包谷式山城が付属する都市として南原小京（１類型）を分類している[2)]。

一方、李京贊の研究（李京贊2002）では南原小京を格子型土地区画が行われた都市と分析している。李京贊の研究は基本的に朴泰祐と同様、南原の旧地籍図をもとにしている。しかし、具体的な復元案の規模は朴泰祐とは少し違いが出ている。

李京贊は南原の格子型土地区画の規模を東西1,345（620+85+640）ｍ、南北を1,410ｍにした。その区域を東西８区、南北９区の単位区画にして、中央部の南北軸線上に東西幅85ｍの半区区画が立ち並んだ９行９列の坊里区画形態をとっていると見ている。

李京贊は、南原の区画地割の形態が全体的には比較的均一な直角方位をとっているが、単位区画地割の形態を詳しく見れば、上部と下部の東西区画線が互いに違う方位をとっていることを指摘した。その

違いは、南北方向区画線と東西方向区画線の測量の偏差をあらわしていると見ている。したがって、南原小京は造営されてから継続的に原形を維持したのではなく、数回にわたって拡張があったことを示しているとした。

李京贊は、南原の格子型土地区画の幅は東西方向で140 m ·155 m ·160 m ·165 mがあり、南北方向も155 m ·160 m ·165 mであったと見ている。確かに、南原の旧地籍図を検討すると、単位区画の東西幅と南北幅はすべて一致していないことがわかる。

山田隆文の南原小京の研究（山田隆文2008）では、旧地形図（1938年製作）をもとにしている。また、朴泰祐の復元案をそのまま認めて、南原市内に対して南北大路を中軸にもつ東西10坊×南北10坊（南北長1,600 m、東西幅1,680 m）に復元している（図４）。

一方、山田隆文は朴泰祐の復元案では、官衙が位置していると推定している中央の北辺まで中軸大路の地割の痕跡が明瞭であることから、日本の平城京などで見られる官衙（宮）のような存在は疑わしいと見ている。南原邑城の内側に区画地割の乱れが見られるので、その地域に宮に相当する施設が位置されていた可能性を指摘している。

以上、旧地籍図と旧地形図の検討から分析された南原の都市構造（区画地割の形態）に対する既存研究をまとめた。一部違いは存在するが、区画地割の規模や中軸大路の設定など基本的な南原小京の区画地割のプランは３人の研究者の意見が概ね同一である。すなわち、南原の区画地割プランの設定では旧地籍図·旧地形図をもとにして方形の東西南北区画を想定している。一方、李京贊の復元案は朴泰祐の復元案より精密な分析が行われていることもわかる。しかし、旧地籍図·旧地形図で土地区画の痕跡が見えるところはよいが、北西側と南東側の区画は川の上であり、川を越えて山の丘陵まで及んでいる。当然、区画地割プランの計画があっても実際にすべての地域に実施されたかどうかは疑問である。また、３人の研究では、南原小京の区画地割プランは提示されているが、小京城の比定による具体的な小京の構造はあまり検討されていないのである。

Ⅲ. 南原小京の都市構造検討

1. 関連遺跡の現況

南原小京の都市構造に関連する研究は、当時の区画地割が明確に確認される旧地籍図·旧地形図の分析によって行われた。しかし、南原市内は他の五小京が設置された地域と比べても、発掘調査の事例もかなり少なく、現段階では南原小京と関連する遺跡の調査もほとんど行われていない。南原と同じく、旧地籍図の分析がなされた尚州[3]は発掘調査によって区画地割の痕跡である道路関連遺構と区画の内側（坊）に住居跡や建物跡が確認された[4]（図５）。

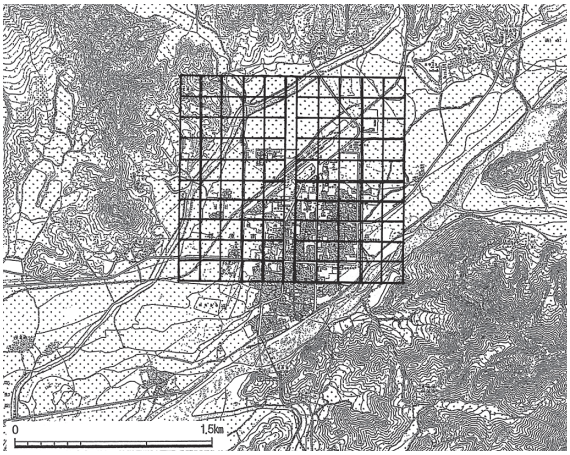

図４ 山田隆文の南原小京復元案
（山田隆文2008から引用）

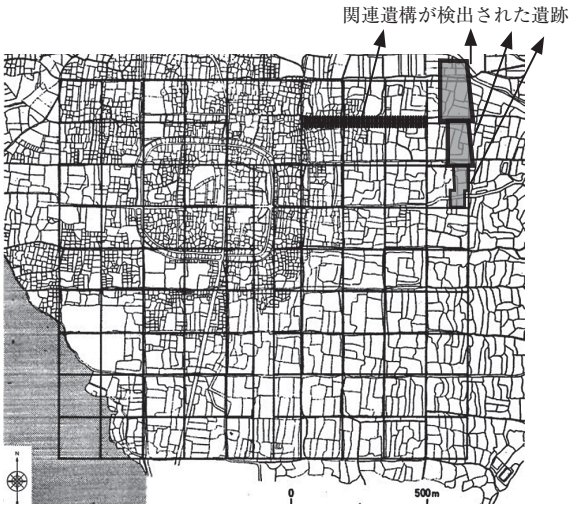

図５ 尚州の復元案と関連遺跡分布
（朴泰祐1987から引用、筆者再編集）

表２　南原小京の関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構
1	南原北門址および 北壁推定地遺跡	2010年	500㎡	?	北壁の基礎部
2	南原都市ガス管路埋設内遺跡	2011年	400㎡	統一新羅、高麗、朝鮮	西の城壁の石築施設 土器片
3	南原城北門跡試（発）掘調査	2014年		朝鮮、統一新羅	北門の基底部 城壁

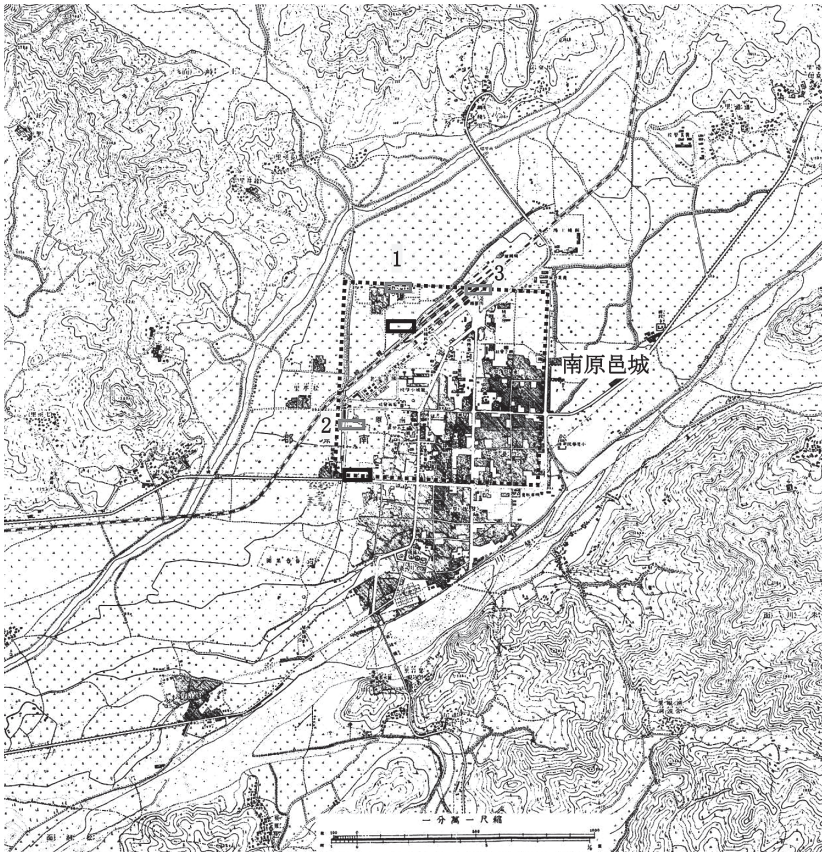

図６　南原の旧地形図（1938年）と関連遺跡
1. 南原北門址および北壁推定地遺跡　2. 南原都市ガス管路埋設内遺跡　3. 南原城北門跡試（発）掘調査

その結果、旧地籍図上の区画地割の推定がある程度正確であることが証明されている。したがって、南原でも尚州のように旧地籍図上の区画地割の痕跡が発掘調査で確認できるかが問題である

南原小京の関連遺跡として検討ができるのは、南原城の調査で確認された遺跡の一部だけである（表１、図６）。また、南原城の調査も朝鮮時代の遺構を対象にしているため、南原小京との直接的な関連性は把握できない。最近の北門跡の調査では朝鮮時代の遺構の下部に割石で築造された城壁が検出され、統一新羅時代の初築城壁と推定されているので興味深い。また、表1-2の南原都市ガス管路埋設内遺跡から統一新羅時代の遺構が検出されているので、これからの調査成果を期待したい。

一方、既存研究では南原市内の北西側に位置している蛟龍山城を小京城あるいは小京と関連する城郭として見ている（図７）。蛟龍山城は周囲3,120ｍの石築山城であり、百済時期に築造されたと推定されている。山城は海抜500ｍに位置し、市内までは約２ｋｍの距離である。区画地割が見られる市内地域からの距離はあまり離れていないが、山城の立地から見ると、直接的に南原小京の治所城に比定するには無理があると思われる。だが、2015年に発掘調査が行われているので、その結果に注目したい。

2. 南原小京の都市構造復元

では、南原小京の都市構造を検討してみよう。南原小京の関連遺跡はほとんどないので、考古学的検

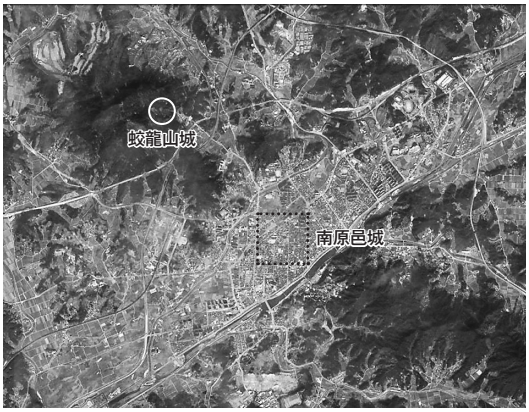

図７ 南原の地形と遺跡

討は厳しいものがある。ここでは、既存研究のように地籍図上に見られる南原小京の区画地割の存在とその都市構造を推定してみる。

既存研究の項で検討したように、南原小京は地籍図の痕跡から見ると、区画地割プランが存在した都市構造である可能性は高い。当然、その区画地割が実施された地域が小京の中心地であることになる。

しかし、筆者の考えでは、既存研究の復元案のように南原市内地域に完璧な方形の南北東西の区画地割プランがあったかどうかは疑問である。関連史料の記事と李京贊の研究を分析すると、南原の区画地割の形態はやはり、全体的な区画地割プランが最初に施行されたのではなく、時期によって変化していることが推定できるのではないか。

李京贊の研究では、九州と五小京の一部都市の格子型土地区画の検討で、区画地割の性格を田地区画[5)]と市街地区画[6)]に分類している。また、李京贊は都市によって、区画地割の形態が単位区画に均等に分割される大区画が存在したところ[7)]と、施行時期により単位区画が拡張しながら大区画になるところ[8)]に分類した。それによると、南原の区画地割の形態は市街地区画で、単位区画地割が順次的に行われたことになる。

ここで、まず区画地割プランが施行された時期を検討する必要がある。関連史料の項で述べたように、南原は「邑の内側の村に井田法を使って、九つの区域に区画して、その址が残っている」という『新増東国輿地勝覧』の記録がある。その記録を信用すると、統一期以前に区画地割が行われていることになる。また、区画地割の性格は田地区画の意味がある。一般的に区画地割プランが施行された時期を統一期の五小京の設置に関連して考えているので、その関連性があるとは考えにくい。

筆者が旧地籍図をあらためて分析してみた結果、南原小京の都市構造の復元案を既存研究とは少し異なる２案に推定することができると思う。

まず、既存研究で出されている区画地割プランが実際に存在した可能性を否定的にみる復元案である。その場合、南原小京の設置の際、南原の地形に沿って、都市の建設計画がなされたと見られる。また、小京の中心地の一部だけ区画地割が行われた可能性も否定できない。南原小京の区画地割は時期によって変化していることや旧地籍図に見られる区画地割の痕跡からは方形の東西10坊×南北10坊のようなプランの存在が疑わしい。

つまり、南原地域には既存研究の復元案のような完璧な区画地割プランは存在していなかったかあるいは施行されていない可能性がある。南原地域の区画地割は、地形にそって時期により数回行われたことになる。したがって、完璧な方形ではなく、南西から北東側につながる単位区画の痕跡が旧地籍図に確認できる理由である（復元案１、図８）。南原小京の中心地は、単位区画の区画地割が行われたと推定できるが、南原邑城の範囲とは大きく異なっていないだろう。

一方、既存研究でも言及されている『新増東国輿地勝覧』の記録の内容によると、南原地域に五小京が設置される以前に朝鮮時代まで痕跡がわかる区画地割が存在したことになる。ところが、そういう痕跡が南原小京の設置時期と関連して何ら記録の存在しないことも不自然ではないか。

簡単な記事であるが、『三国史記』には南原小京の設置記録がある。南原地域に小京が設置された際、区画地割の痕跡が存在したとすれば、『新増東国輿地勝覧』に出ている‘井田遺基’に関連する何らかの関連記録が『三国史記』あったはずではないだろうか[1)]。

したがって、南原地域の区画地割は南原小京の設置とともに行われたと見ることができる。

この場合、南原小京の設置と関連する区画地割は全体を方形にした東西７列･南北７列に復元ができると思われる。南原小京の設置の際、地形上施行可能である全体的な区画地割プランが存在したことになる。旧地籍図に見える区画地割の痕跡と地形上から、方形の区画地割プランを最大に設定してみれば、東西７列･南北７列が妥当であろう。地籍図の分析からも特に図９の推定範囲の外側からは東西区

図８ 南原の都市構造復元案１

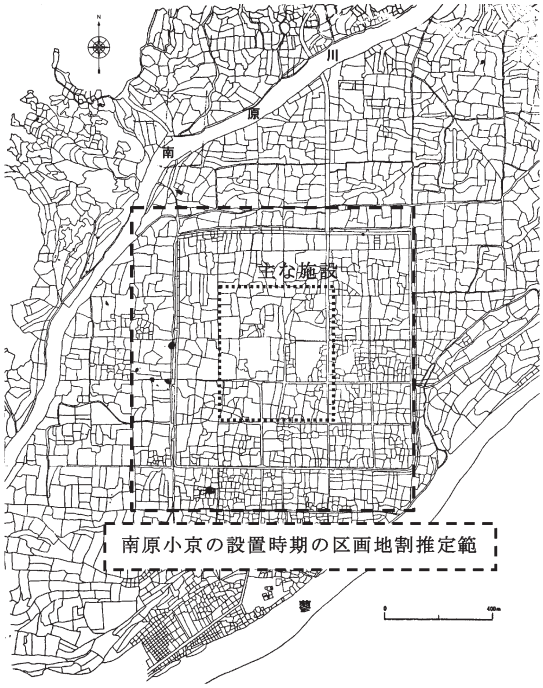

図９ 南原の都市構造復元案２

画線の方向の変化が明らかに見られ、南北区画線も明確ではないがわかる。また、中央部の北側に官衙のような主な施設が想定できる（復元案２、図９）。一方、南原小京の区画地割と中心地は南原城の規模と関連があると推定される。その場合、南原小京城も小京の中心地を囲む形態の城郭である可能性が考えられる。

南原小京の区画地割を東西７列･南北７列に想定すると、旧地籍図に見える他の痕跡は都市の発達により、その施行時期は推定できないが、順次的に区画地割が行われた可能性があると思う。南原市内地域の地形は川に挟まれている形状である。したがって、既存の区画地割の延長で、北東側、南西側に広がったと思われる。

以上、統一期に施行された南原小京の構造復元案を二つ示してみた。南原の旧地籍図に見える区画地割プランの痕跡が統一期以前から時期によって変化してきたか、あるいは南原小京の設置にともなって行われたかは不分明である。これからの発掘調査によって明らかになることを期待するしかない。

まだ、あいまいな部分が多いが、南原小京の設置時期の都市構造は中心地と市街地を囲む城郭をもって、区画地割が施行されている形態であると考えられる。

Ⅳ. おわりに

本稿では、統一新羅時代に設置された五小京の一つである南原小京の都市構造を検討してみた。本来は主に考古資料を通して小京の都市構造や中心地の復元を検討しなければならないが、南原小京に関連する考古資料が足りないので、旧地籍図の分析を通して都市構造の復元案を検討してきた。前述したように南原の旧地籍図は区画地割の痕跡が明確であり、既存研究の中でも都市構造の復元案が出されている。

筆者は、既存研究の南原小京の復元案を検討してみたところ、南原小京の都市構造に対して少し異なる復元案を提示することができた。

まず、旧地籍図の痕跡から南原小京の区画地割を東西７列･南北７列に想定することができると思われる。

また、旧地籍図に見える他の痕跡は都市の発達により、順次的に区画地割が行われた可能性があると思う。

南原小京の区画地割プランは小京の設置とともに施行され、その範囲は南原邑城の範囲と密接な関連があると思われる。

残念ながら、南原小京の都市構造に対する復元案

は関連する考古資料が足りないので、今後、発掘調査の成果を期待することにしたい。現段階では、地籍図の分析を通して今回示した復元案を含め、多様な南原小京の都市構造の復元案が提示されているので、本稿はこれからの考古学的検討の土台になることで意味があると思う。

注

1）九州の一つである完山州の治所があった地域。
2）他に、羅城で市街地が防御されているが、区画地割計画がなされていない都市を２類型（西原小京・中原小京・北原小京）、山城が付属しているが、区画地割計画の痕跡が確認できない都市を３類型（金官小京）に区分した。
3）九州の一つである沙伐州の治所。
4）嶺南文化財研究院 2004『伏龍洞３地区遺蹟』
嶺南文化財研究院 2006『伏龍洞397－5番地遺蹟』
嶺南文化財研究院 2008『伏龍洞256－1番地遺蹟』
嶺南文化財研究院 2009『伏龍洞230－3番地遺蹟』
嶺南文化財研究院 2009『伏龍洞10－4番地遺蹟』
5）軍事的目的あるいは新開拓の一環として、施行された。小京と州の治所の軍事的重要性が関連している区画地割（屯田）。南原（南原小京）、尚州（沙伐州）がある。
6）統一新羅時代の地方行政制度の整備過程と関連がある。小京と州の中心地に市街地区画が目的で区画地割が行われた。清州（西原小京）、光州（武珍州）、全州（完山州）がある。
7）尚州（沙伐州）、光州（武珍州）。
8）南原（南原小京）、清州（西原小京）、全州（完山州）。
9）『三国史記』には五小京が設置された地域の区画地割関連記事はまったくないのも事実である。しかし、朝鮮時代の関連記録がある地域も南原（小京）だけである。

参考文献

朴泰祐 1987「統一新羅時代の地方都市に対する研究」『百濟研究』第18輯、忠南大学校百濟研究所
李京贊 2002「古代韓国地方都市の格子型土地区画の形態特性に関する研究」『建築歴史研究』第11巻、韓国建築歴史学会
山田隆文 2008「新羅の九州五小京城郭の構造と実態について―統一新羅による計画都市の復元研究―」『考古学論攷』第31冊、橿原考古学研究所

報告書

嶺南文化財研究院 2004『伏龍洞３地区遺蹟』
嶺南文化財研究院 2006『伏龍洞397－5番地遺蹟』
嶺南文化財研究院 2008『伏龍洞256－1番地遺蹟』
嶺南文化財研究院 2009『伏龍洞230－3番地遺蹟』
嶺南文化財研究院 2009『伏龍洞10－4番地遺蹟』
郡山大学校博物館 2010『南原城北壁一帯試（発）掘調査略報告』
㈶全羅文化遺産研究院 2011『南原下井洞都市ガス管路埋設地域文化遺蹟発掘（試掘）調査』
郡山大学校博物館 2014『南原城北門跡試（発）掘調査略報告』

Comment

定森　秀夫
人間文化学部地域文化学科教授

李在桓さんは、2012年度に地域文化学専攻博士後期課程に入学した韓国からの留学生で、統一新羅時代の九州五小京に関する考古学的研究を進めている。現在、博士論文を鋭意執筆中である。李在桓さんは、すでに本誌第33号(2013年)に「統一新羅時代の九州と五小京の考古学的研究現況と課題」を執筆していて、金海小京に関する論文も査読雑誌に投稿中である。今回は五小京の一つである南原小京に関する検討であるが、ここでも考古学的検討が可能な発掘調査は皆無に等しい。ただし、解放前の地籍図や地形図から都市構造の復元研究がいくつか行われてきた小京である。今回の論文で、李在桓さんは地籍図を利用して、これまでの研究とは異なる都市構造の復元を試みた。今後の南原市内での発掘調査の成果に期待するところが大であるが、本論文は南原小京の都市構造復元に関して一石を投じる論文になると思われる。